全国の園長先生に無料でお届けしています

2017 秋 Autumn

子どものよりよい育ちをともに考える
ベネッセの情報誌

これからの幼児教育

PDF 版では表紙写真を公開しておりません。ご了承ください。

特集

新要領・指針を生かす！
次年度計画の検討ステップ

大阪総合保育大学教授 **大方美香**
御殿山すこやか園（東京都・公立）／國學院大學教授 **塩谷 香**
若竹保育園（千葉県・私立）／千葉大学准教授 **砂上史子**

データ

乳幼児の親子のメディア活用調査

白梅学園大学学長 **汐見稔幸**

ベネッセ教育総合研究所 http://berd.benesse.jp/

これからの幼児教育 2017 秋 Autumn CONTENTS

2 特集

新要領・指針を生かす！
次年度計画の検討ステップ

2 インタビュー
新要領・指針を活用し、保育の質をどう高めていくか
大阪総合保育大学教授 大方美香

6 事例1
1学期の振り返りに「10の姿」の視点を導入 週案を通して子どもの育ちを振り返る視点を磨く
御殿山すこやか園（東京都品川区・公立）／國學院大學教授 塩谷香

10 事例2
園の理念にこだわりながら研修や月案に「10の姿」の視点を反映 子どもの育ちを語り合う
若竹保育園（千葉県千葉市・私立）／千葉大学准教授 砂上史子

14 参考資料
「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」改訂・改定のポイント

16 データから見る幼児教育

第2回 乳幼児の親子のメディア活用調査

16 インタビュー
メディアから得る情報が豊かになるほど 実体験を増やす保育の工夫を
白梅学園大学学長 汐見稔幸

18 調査データ
乳幼児のメディア利用の実態と 母親の意識・かかわり方

「これからの幼児教育」ウェブサイトでは すべての記事を無料でダウンロードできます

◎過去1年間の特集テーマ

2017年 春号 ニッポンの幼児教育は、どう変わるのか？
2016年 夏号 幼児の非認知能力を育てる保育者を、どう育成する？
2016年 春号 保育の質の向上につながる保護者との関係のあり方を考える

※本誌は最新号、バックナンバー等の追加発送は行っておりません。

http://berd.benesse.jp/magazine/en/backnumber/ または ベネッセ　これからの幼児教育 で 検索

※ここでご紹介した内容、デザインなどは変更になる場合があります。

「これからの幼児教育」2017年秋号
編集発行人／岡田晴奈　発行所／(株)ベネッセコーポレーション　印刷製本／凸版印刷(株)　編集協力／(有)ペンダコ　執筆協力／二宮良太
撮影協力／ヤマグチイッキ　荒川 潤　イラスト協力／アサヌマリカ

◎お問い合わせ先／「これからの幼児教育」お問い合わせ窓口　〒700-8686 岡山市北区南方 3-7-17
0120-926-610（通話料無料）受付時間：9:00 ～ 18:00（土日・祝日・年末年始除く）
※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は、086-214-6301 へおかけください（ただし通話料がかかります）。

はじめに

いよいよ2018年4月から、新しい幼稚園教育要領と保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が実施されます。

前号では、この新要領・指針の方向性、背景を含めた内容理解を中心にお届けしました。これを受けて本号では、「新要領・指針をどう活用し、保育の質を高めていくか」について、改訂・改定にかかわった先生方のお話をうかがいました。また、来年度の計画作成に向けて、新要領・指針の視点を園の運営・研修に取り入れている園の実践例を具体的にご紹介しています。

来年度から全く新しいことが始まるのではありません。これまでも行ってきた保育の振り返りや次年度計画作成のステップにおいて、新要領・指針で提示された視点を取り入れていくことが、新要領・指針での「カリキュラム・マネジメント」につながると、取材を通じて改めて実感しています。

日本の幼児教育にとって大きな節目となる2018年度に向け、各園の運営にお役立ていただければ幸いです。

『これからの幼児教育』編集部

前号を含めたバックナンバーは、インターネット上でご覧いただくことができます。
「ベネッセ　これからの幼児教育」でご検索ください。

http://berd.benesse.jp/magazine/en/backnumber/

特集

新要領・指針を生かす！
次年度計画の検討ステップ

新しい「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の施行まで半年を切りました。次年度に向けて、どのような視点から保育を見直し、どのように計画に反映させるとよいのでしょうか。今年度中に園として取り組んでおきたい準備について考えていきます。

インタビュー

新要領・指針を活用し、保育の質をどう高めていくか

新要領・指針の内容を基に園全体の保育の質を高めていくには、どのようなステップで保育の見直しを進めるとよいのでしょうか。今回の要領・指針の改訂にかかわった大阪総合保育大学の大方美香教授にお話をうかがいました。

改訂の背景にある社会の変化

蛇口を見て泣く子どもに保育者はどんな言葉をかけるのか

急速に社会が変化する中、保育者は子どもたちとどのように向き合っていくのか――。今回の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂の背景には、そのような課題意識があると私は捉えています。

近年、私たちの生活は変わりました。例えば水道は、今はレバー式や自動栓が当たり前で蛇口をひねる機会は減りました。こうした変化は、子どもたちの育ちと無縁ではありません。入園直後、水飲み場の蛇口を見て、やり方が分からないと泣いたり、たたいたりして諦める子もいます。自宅の自動栓に慣れた子どものこうした反応を見て、「昔はできたのに」と大人たちは嘆きます。とはいえ、変化し続ける社会を生きる子どもたちのために、私たちができることは「蛇口のあった過去の経験」を取り戻すことではありません。私たちがすべきことは、新しい環境に適応する力を子どもに育むことです。

保育の原点は、「子どもの生活」に添った「子ども理解」です。目の前の子どもの姿、暮らしを受け止め、蛇口にとまどう子どもにどんな言葉をかければ、未知の変化に対応する力を育めるのか。そうした観点での保育の見直しが問われています。

地域や家族のあり方が変わり園の役割がますます重要に

地域の中で多様な人間関係を学ぶ機会が減り、身近な生活モデルから学習しづらくなったことも、子ども

大阪総合保育大学教授
大方美香 おおがた・みか
◎私立幼稚園勤務などを経て現在、大阪総合保育大学児童保育学部長、教授。同大学院教授。城南学園子ども総合保育センター長。自宅を開放して地域の子育てサロンぶらんこを主催。専門分野は、保育学・乳幼児教育学。共著書に『乳児保育計画論』（ふくろう出版）など。

＊本冊子での「新要領・指針」とは、平成29年に告示された「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の3つを指します。
＊幼稚園教育要領改訂、保育所保育指針改定、幼保連携型認定こども園教育・保育要領改訂について、このインタビュー記事内では「改訂」で統一しています。

の育ちに大きく影響しています。例えば、保護者が近所の知り合いやお店屋さんなど様々な人たちとやり取りする場面を見るうちに、子どもは語彙や所作、人との関係性などに気づきます。しかし、核家族化や少子化により、多様な価値観や考え方に触れづらくなり、これまで地域や家庭で自然と身につけていた生活の知恵や人との関係性、言葉と行いの一致などは、意識的に園で育むという視点がないと身につかないものになっています。子どもにとって必要な体験を計画的に編成することを保育者が意識する必要があるのです。

保育の専門家の下で、集団生活を送り、地域社会や小学校などと交流する経験がますます重要になる中で、保育の現場で何を大切にし、子どもにどのような力をつけていくのかを整理したのが、今回の改訂です。例えば、改訂で示された「10の姿」（**P14～15「参考資料」参照**）は、子どもを理解するとともに、保育者や小学校、保護者の間などで、目指す姿を共通の言葉で確認し合う大切な手がかりとなります。これらを踏まえ、小学校にどうバトンをつないでいくかを各園で見つめ直していただきたいと思います。

改訂内容を保育に生かすための視点

ポイントは 保育の可視化、言語化

現場の先生方にお伝えしたいのは、幼稚園・保育所・認定こども園のいずれも、実践面では従来と大きく変わらないということです。到達目標ができたり、小学校への早期教育が求められたりしているわけではありません。その上で、今回の改訂で重要なことは、「身近な環境に子どもが能動的に、主体的に関わり、試行錯誤しながら学んでいくこと」「環境に子どもが関わって意味を見出していくということ」「『見方・考え方』を活かす教育であること」が示されたことです。保育者には、子ども理解に基づいて、意図的・計画的に園生活全体の環境構成をし、子どもが保育者や友だちと関わりながら、さまざまな体験を通じて学びを深めたり発展したりできるようにしていくことが求められています。

また、従来、保育の現場で暗黙知や経験値として積み重ねてきたことを、可視化、言語化し、保育者が意識することで、遊びにおける一人ひとりの気づきの違いに対応し、育ちに寄り添えるようになります。

これは、乳幼児期における園の社会的役割が高まる中で、これまで以上に保護者や社会に対する説明責任を果たすことにもつながります。「今日は○○をしました」といった報告だけで終わらせず、その活動が子どもの成長にどうつながるのかを、それぞれの園が目指す子ども像と照らし合わせて説明できるようにしていきたいものです。そのためには、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」を念頭に置き、園の実践の中で育まれた資質・能力を考えることが大切です。

「10の姿」を活用して複数の視点で保育者の発想を広げる

「5領域」や「10の姿」を活用して、活動や遊びを充実させることも大切です。例えば、芋掘りを「10の姿」の視点にあてはめて考えてみましょう。「自然との関わり・生命尊重」はもちろん、芋を何げなく数えたり大きさを比べたりすることは「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」につながります。このような場面を保育者が予想しておくと、「どっちが大きいかな」「いくつ採れた」など「言葉による伝え合い」が生まれます。さらに農家の人などと接する中で「社会生活との関わり」も育まれます。

「10の姿」を活用した保育の充実には、子どもの体験を言語化し、応答する保育者の姿勢、子どもが試行錯誤していける環境構成の再構築、教材研究が求められます。こうした保育の振り返りや改善を保育者1人で行っても、課題への視点が広がりづらいものです。ですから、園内研修などで協働的に取り組むことをお勧めします。まとまった研修時間を確保することが難しければ、隙間時間に集まれる人だけで話し合うことから始めても構いません。

保育者の視点を広げる園内研修の工夫を、水遊びを例に考えてみましょう。ホワイトボードの真ん中に「水遊び」と書き、そこから思いつく活動を書き出してから、全体を眺めてみます。すると、「プール」「シャワー」「色水遊び」「ジュース屋さん」

「氷遊び」「手洗い」など、一見、無関係な活動が、実はつながっていることに気づくでしょう。

発達段階に応じて活動に系統性と広がりを持たせる

次に、書き出した各活動が「10の姿」のどこにあてはまるのかを話し合います。様々な活動場面に「10の姿」が入っていることを確認することが大切ですが、保育者が子どもの姿をどう捉えるかによって、対応する項目が異なる場合があります。そうした違いに気づくことが、子ども理解に基づいた保育の第一歩で、保育の向上につながっていきます。

その上で、子どもの発達段階や園の状況などに応じて、取り入れる活動を考えます。「10の姿」は、5歳になって急に育つわけではありませんから、それぞれの発達段階で何ができるかを系統的に考え、指導計画をつくります。例えば、3歳児は水遊びが楽しいと感じられればよしとする、5歳児はおもちゃを浮かべたり、色水遊びに発展させたりすることで、科学概念の基礎となる自然現象を「不思議だな」と思う体験を組み入れる、といった具合です。

指導計画と聞くと苦手意識を感じる先生は、料理のレシピのように考えていただくとよいと思います。相手（＝子どもの発達段階）に合わせて栄養（＝身につけたい力）のバランスを踏まえた献立表（＝指導計画）を作るのです。レシピとして文字化して整理すると、シェフ（＝保育者）のスキルによる料理のばらつきを抑えられますし、それぞれの活動が実はつながっていることにも気づくでしょう。

こうした研修を何度か行うと、保育者に発想の広げ方が身につき、1人でも保育を深く捉えようとする習慣がついていきます。最初は経験やアイデアが豊富な主任クラスの保育者が、ファシリテーターとして皆の発想を広げていくのが理想的です。

次年度計画策定へのステップ

子ども理解を出発点に5ステップで考える

以上の視点を全体的な計画や指導計画に取り入れることが、園全体の保育の質を高めることにつながります。これは、幼稚園教育要領では、「カリキュラム・マネジメント」という言葉で表されています。今回の改訂のポイントで、保育所や認定こども園においても不可欠な考え方です。

このカリキュラム・マネジメントを今年度中に進めていく最初のステップは、自園の子ども理解をすべての保育者の間で図ることです（**図 Step1**）。地域や家庭にも目を向け、子どもの実態や課題をしっかりと把握してください。子ども理解に基づいてこそ、全体的な計画も指導計画も生き生きとしたものになります。

次に、園の理念や教育・保育目標を、子どもの実態や課題に照らし合わせて再確認します（**図 Step2**）。また、園が目指す方向性について、保育者間で共通理解し、同僚性や協働性を育むことも大切です。今回の改訂を時代の節目と捉え、「3つの柱」（**P14～15「参考資料」参照**）「10の姿」も参考にしながら、人間教育としての「不易と流行」について検討してください。その上で園として不易の目標があってもよいですし、時代の変化に合わせて変容するという判断があってもよいでしょう。

そして、園の理念や目標を実現するための「保育の内容」を考えます。「保育の内容」である「5領域」を「10の姿」から見直し、資質・能力として書かれている「3つの柱」とのつながりを確認しましょう。併せて、子どものよりよい育ちにつながる経験とは何か、それに適した環境構成や保護者への必要な援助とはどのようなものかを考え、年間指導計画や月案を作成します（**図 Step3**）。

その糸口になるのが、先にお話しした研修などを通じた「10の姿」の活用です。例えば5歳児の活動や遊びを「10の姿」と照らし合わせて、自園の保育に不足していた視点も補いながら計画を練ってください。「10の姿」を自園のどの活動で確認するかは、園の状況や特徴に合わせて考えればよいでしょう（**図 Step 4**）。年度末には、一年間の保育全体を振り返り、次の学年や小学校につなぎます（**図 Step5**）。

なお、保育所保育指針では0～2歳児の記載が充実したことも改訂のポイントです。乳児期から生活の質を高めることが、その後の育ちを豊かにするという視点で、保育を充実させていくことが求められていま

図 新要領・指針の施行を見据えて取り組む、今年度の検討ステップ

※あくまで一例です。各園の状況に応じてアレンジしてください。

保育の可視化・言語化

Step 1 自園の子どもの実態を把握する。

Step 2 Step 1を基に、園の理念や教育・保育目標を再確認する。

指導計画作成

Step 3 従来の保育内容を「5領域」「10の姿」の観点から見直し、「3つの柱」とのつながりを確認する。よりよい育ちにつながる経験や必要な環境構成・保護者への援助について考える。

対応

日々の保育の改善

Step 4 園内で研修や話し合いなどを行い、5歳児の活動や遊びを「10の姿」で見てみる。その後、教材や声かけなどの具体的な改善策を考える。

Step 5 年間目標などを活用して、個人の育ちやクラス集団としての育ちを振り返る。要録なども活用して次に担当する保育者や小学校にバトンタッチする。

※「10の姿」は評価基準ではない点に留意する。

11月	12月	1月	2月	3月	4月
• 保護者会 • 保護者や地域へのアンケート		• 小学校との円滑な接続を図る工夫（実施時期は任意）		• 要録作成	

※大方先生のお話を基に編集部で作成。

す。発達の連続性を踏まえた保育計画を、全体的な計画に盛り込みます。

保育を実践する保育者の意識を高めることも欠かせません。保育に教科書はなく、日常の中での子どもの興味・関心によって学びが進む、いわゆるアクティブ・ラーニングですから、保育者の役割はとても大きくなります。これまで現場で大切にされてきた、子どもを「援助」する視点に加えて、保育の専門家として、いかに一人ひとりや全体の育ちを促し、小学校以降の学びにつなげていくかという役割意識を持っていただきたいと思います。

園長・主任の役割

園長が方向性を示し 主任が中心になって具現化

カリキュラム・マネジメントは、幼児教育において育みたい資質・能力の実現に向けて、子どもの姿や地域の実情を踏まえつつ、教育課程を編成し、指導計画を作成することです。園長先生の役割は園としての方向性を示すことであり、それを主任クラスの保育者が中心になって、園全体で具現化していきます。そのため、若手の保育者に適切な助言ができるよう中堅の保育者を育成していくことも、園長先生に求められる役割でしょう。

今まさに幼児教育は大きく変わろうとしています。しかし、大切なのは、何か新しいことを始めることではありません。従来の実践を園が目指す方向性を踏まえて見直し、「10の姿」と照らし合わせて偏りや不足を改め、指導計画へとつなげていくことです。今の社会を生きる子どもの姿と園の目指す保育、そして指導計画から形づくる日々の保育をつなげることが、今求められています。

大方先生から 現場のみなさんへ

改訂を機に、保育の現場で実践されてきたことが社会的に高く評価されようとしています。自分たちが積み重ねてきたことに自信を持ち、それを可視化、言語化して説明できるように意識しましょう。社会的な責任を果たす必要性はもちろんのこと、若く経験が浅い世代の保育者にスキルを分かりやすく伝え、保護者や地域から理解と協力を得やすくなることにもつながります。

従来の実践を大切にしながらも、時代の変化に合わせて変えるべきこと、変えてはいけないことという、不易と流行の視点を持って保育を絶えず振り返ることで、これからの子どもが生きる20年後、30年後につながる保育を実践していきましょう。

事例1

1学期の振り返りに「10の姿」の視点を導入 週案を通して子どもの育ちを振り返る視点を磨く

御殿山すこやか園（東京都品川区・公立）

幼保一体施設の御殿山すこやか園では、４・５歳児の1学期の振り返りを行う際に、子どもの育ちを「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（以下『10の姿』）」の視点で振り返る園内研修を行いました。新しい幼稚園教育要領を具体的に意識した初めての試みでしたが、育っている力のバランスや保育者による見取りの視点の違いなど、多くの点に気づきました。

次年度の教育課程に向け、保育者が視点を共有

新要領を踏まえた園のビジョンを再確認

御殿山すこやか園は、2015年に都心の高層住宅の中に開園した幼保一体施設です。０～５歳児の一貫した保育教育と、長時間保育における子どもの安心・安定に重点を置いて、子どもが中心にいることを大切にした保育に取り組んでいます。

幼稚園では、学期末ごとに実践を振り返り、次学期の指導計画を見直しています。今年８月、園内研修の形で、この見直しに初めて新要領の視点を取り入れました。

研修では、最初に御殿山幼稚園園長の大澤洋美先生が、新教育要領を踏まえて、園の理念や目指す子ども像を整理したビジョンを説明し、大きな方向性を共有しました。大澤先生は次のように話します。

「教育要領を基盤にした上に園の教育目標があり、それに向かって保育が展開されています。そして、育ちの最終地点の窓口として『10の姿』があります。今回の研修では、新しい教育要領の方向性や視点を踏まえて保育を振り返ることで、これからの保育の一歩としていきます」

週案を基に子どもの育ちを「10の姿」から見直す

研修に先立ち、４・５歳児担当の保育者は週案を基に１学期を振り返り、子どもの姿から「10の姿」の視点につながる要素を見つけて、色分けした付箋紙に書き出しました（**写真１**）。主任で４歳児担任の鈴木真衣子先生はこう説明します。

「これまでも週案には幼児の実態から何が育っているのかを考え、子どもの育ちを記入してきましたから、その子どもの育ちが、『10の姿』のどの視点につながっていくのかを振り返ると分かりやすいと考えました」

研修では、４・５歳児担当の保育者がそれぞれ付箋紙に書かれた育ちの姿について、具体的な活動や遊びの様子を交えて説明しました（**写真２**）。例えば、鈴木先生は、「グループで夏野菜を育てるという５歳児の活動には、①グループで育てたい野菜を決める、②グループで夏野菜を植える、世話をするという過程があり、そこでは『10の姿』の『協同性』『言葉による伝え合い』『自然との関わり・生命尊重』が見られたと読み解きました。さらに、栽培している野菜を図鑑で調べるなど『数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚』もグループによって見られました」などと、子どもの姿を「10の姿」の

御殿山すこやか園
施設長
御殿山幼稚園
園長
大澤洋美先生

御殿山すこやか園
御殿山幼稚園
主任・4歳児担任
鈴木真衣子先生

＊「10の姿」の各項目は、P14～15「参考資料」に掲載しています。

視点から読み解いていきました。園では１学期をⅠ～Ⅲ期の指導計画に分けており、10色の付箋紙は期ごとにホワイトボードに貼って整理しました（**写真３**）。

「10の姿」を色分けし育ちのバランスを把握

園には新規採用の保育者もいますが、「10の姿」を色分けすることで、それぞれの項目名に慣れていなくてもどのような育ちがあったかを視覚的に把握しやすくなります。色の多寡のバランスから、育ちの偏りも見えやすくなりました。例えば、園庭スペースが限られているという事情により、普段から意識して体を動かす活動を取り入れていますが、それでも「10の姿」のうち、「健康な心と体」を表す青色の付箋紙は少ない結果となりました。

５歳児の付箋紙には、一斉活動として保育者が意図的に設定したものから見られた育ちに丸いシールを貼って区別したことも工夫の１つです（**写真１－２**）。

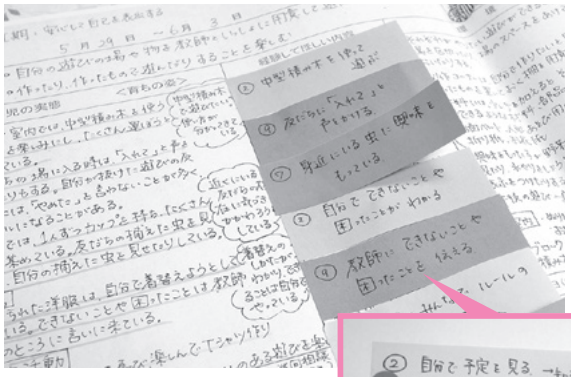
「子どもたちの自発的な遊びからの育ちと、保育者が意図的に計画した活動からの育ちとを分けることで、保育の計画や内容の振り返りにつながります。例えば、『キッズフェスタ』という夏祭りを模した行事では、５歳児はクラスでおみこしをつくりました。保育者は、『協同性』や『言葉による伝え合い』などをねらい、その取り組みを行った次の週には、子どもの自発的な遊びの中でそれらの育ちが多く見られました。保育者が種まきしたことが、子どもの育ちにつながっていることが確認でき、うれしく感じました」（鈴木先生）

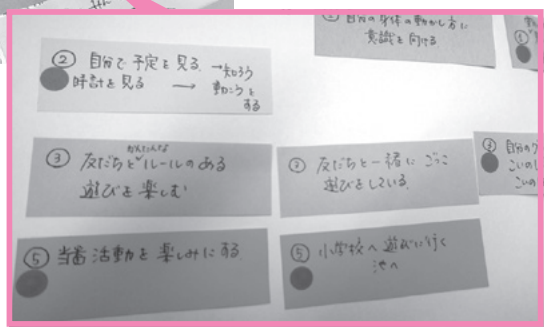
４歳児と５歳児の振り返りを一緒に行ったことで、それぞれの育ちの違いも見えてきました。５歳児は、ルールのある遊びに参加したり、友だちと一緒に活動したりする機会が多く、「協同性」の育ちが多く見られました。さらに人とのかかわりを通して、「言葉による伝え合い」が充実していく姿も目立ちました。一方、４歳児には、「できることは自分でしようとする」「したい遊びの場や物を整えようとする」など、「自立心」の芽生えともいえる様子が多く見られました。

５歳児に見られた「協同性」の育ちは、４歳の２学期に行った運動会や生活発表会などで、友だちと一緒に何かをする楽しさを実感できたことの延長線上にあることを確認。修了時までの残り半年間で「協同性」をさらに伸ばすためには、友だち関係の育ちを重視し、いろいろな相手と主体的に楽しめるような生活の工夫をしたい、といった指導の見通しやアイデアにもつながりました。

４歳児の保育からは、注意すべき点として、「10の姿」そのものを育てようとしない大切さに気づいたことも大きいといいます。

「重視したいのは、幼児教育の基礎となっている心情・意欲・態度を育てることです。４歳児で見られる『10の姿』の芽生えは、５歳児修了



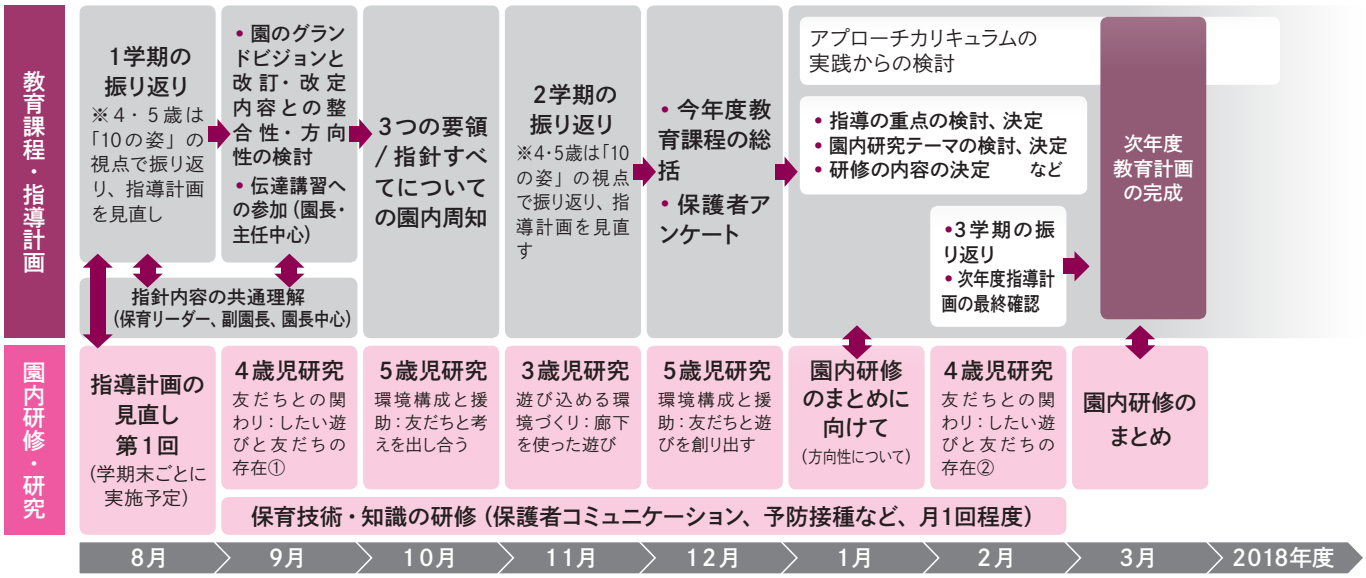


（上）写真１● 10色に色分けした付箋紙と同色のマーカーで、週案の関連する記述箇所にアンダーラインを引いています。
（右）写真1-2● 子どもの自発的な遊びを通した育ちと区別するために、保育者が意図的に設定した活動から見られた育ちには、丸いシールを貼ります。

（左）写真２● 園長を含む４名で研修を進めました。４・５歳児担当の保育者が子どもの姿を語り合うことで、子どもの育ちの共通理解が深まりました。

（下）写真３● 各期の子どもの成長を整理。同じ色の付箋紙を横に並べており、「10の姿」の項目ごとに子どもの変化を把握できます。

図　御殿山すこやか園の次年度に向けたスケジュール



※御殿山すこやか園提供資料を基に編集部で作成。

時までの系統性を考えながら、振り返るための視点として必要ですが、『10の姿』そのものを育てるための保育になることは避けたいと考えています」（鈴木先生）

同じ場面を見ても、保育者によって捉え方が異なることもあります。「自分が育てた野菜を描いている子どもの姿や絵を見て、『数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚』と捉えるか、『豊かな感性と表現』と捉えるかは、保育者が保育に込める意図や計画によって異なると考えます。どちらの捉え方もありえると理解することで、『そういう視点もあるのか』と保育者間の気づきをもたらし、保育観が広がっていきます。また、日々の子どもの姿や環境の意味を丁寧に捉えることで、子どもの姿から『10の姿』に向かう視点が磨かれていくのではないでしょうか」（大澤先生）

新規採用の保育者は、今回の研修を通して「５領域」で示された内容を実践に結びつけやすくなったと感想を述べました。

「『10の姿』はいろいろな活用方法があると思います。まずは、週案の振り返りに記入する『子どもの育ち』の内容を、『10の姿』を意識して書きたいと思います。ほかにも、年度末に年齢ごとに１～３学期の付箋紙を項目別に並べて、『10の姿』ごとの育ちを見ると、保育の特色づくりにつながるヒントが得られるかもしれません」（鈴木先生）

幼保それぞれの良さを大切にしながら、一貫した育ちを支える

０～３歳児クラスでも「育ちつつある姿」を共有

一方、保育所の０～３歳児クラスにおいても、保育所保育指針の改定内容を全体の計画に反映していくため、研修や話し合いによる理解、共有を図っています。併設の五反田第二保育園園長の大川美和子先生は０～３歳児の保育者で行われている話し合いの方向性について、次のように説明します。

「保育の内容を大きく変えるのではなく、これまで実践してきたことを捉え直していきます。『10の姿』に近づけるために何かをするのではないことをまず理解した上で、この時期の子どもの育ちがどのように４・５歳児につながるのか、共通理解を図っていきます」

そのために、各クラスで子どもの具体的な姿から育ちを出し合い、それを持ち寄ってリーダー会議（園長、副園長、０・１歳児リーダー、２・３歳児リーダー、全体リーダーが参加）の中で０～３歳児の子どもたちの実態、課題を共有化していきます。そこには、０・１歳児、２・３歳児の具体的な姿からキーワードが浮かび上がるようにしていきたいという

思いがあります。

「０・１歳の頃から、はっきりと数を意識していなくても物をたくさん並べるのが楽しかったり、言葉は出てこなくても表情やしぐさなどの内的な言語を用いたりする姿が見られます。子どもの心の動きや物事に対する意欲などの内面の育ちが、この先、どうつながっていくのかを言語化し、保育者間で共有したいと思います」（大川先生）

幼稚園と保育園合同の園内研修も実施しており、それぞれの時期の育ちの共通理解も図っていきます。１日通しての保育、シフト勤務のため、話し合いは午睡の時間を活用したり、土曜日の保護者会の前後に行ったりして、保育者の負担にならないように工夫しています。

園長の役割として ビジョンを分かりやすく発信

今後のスケジュールは、12月に実施する幼稚園保護者アンケートの結果と合わせて、各保育者が教育課程の実践を評価したものをまとめます。そして2018年１月より次年度の教育課程の編成を進める予定です（**図**）。

新要領の下で、カリキュラム・マネジメントのあり方はどう変わったのでしょうか。その基本的な要素や流れは従来と同じですが、「10の姿」を始めとした新要領の視点が入り、教育課程を振り返る視点が絞りやすくなったように感じていると大澤先生は話します。

「『10の姿』の視点から保育や子どもの育ちを捉えることで、次の計画がよりよいものとなります。また、保育者一人ひとりが『自分ならこう考える』という思いを持つことで、保育の質も向上していくと考えます。これからも園長の役割として、園のビジョンを分かりやすく発信し、一人ひとりの保育者がそこに向けて何をすべきかを具体的に整理でき、自分たちの実践に充実感を持てるように心がけていきます」

識者が語る 御殿山すこやか園の実践

振り返りの工夫で保育者の視野を広げ 自信につなげている

國學院大學 教育開発推進機構（特別専任）
人間開発学部教育実践総合センター教授 **塩谷（しおや） 香（かおり）**

◎専門は保育学、保護者家庭支援。東京都品川区立保育園園長を経て、和泉短期大学児童福祉学科講師、東京成徳大学子ども学部子ども学科教授を経て現職。主な編著書に『幼稚園幼児指導要録・保育所児童保育要録記入ハンドブック』（ぎょうせい）、『保育者のコミュニケーションスキル』（少年写真新聞社）。

御殿山すこやか園は、保育の振り返り、計画作成など、いずれのプロセスにおいても「子どもの育ちにどうつながる（つながった）か」を軸に取り組んでいます。日々の記録ではなく 週案を選んだのは、子どもの育ちが見えやすいと考えたからですし、意図的な一斉活動とそれ以外とを区別するシールを付箋紙に貼ったのは、育ちの背景を明らかにすることで振り返りの質を高めるためです。日々の保育の振り返りは、改善点の手がかりが見つかるだけでなく、保育者自身がやってきたことへの自信にもつながります。

４・５歳児担任が同じ場で振り返りを行っている点も意義深いと思います。立場の異なる複数で「共有」することで、保育者の視野が広がります。認定こども園や保育所の場合、初めからすべての年齢で共有することは難しいでしょうから、各園の状況に応じて０～２歳、３～５歳などに分けて行ってもよいでしょう。

ポイントは、接続の部分を意識することです。例えば０～２歳、３～５歳と分けて振り返る場合、次のステップとして、２歳と３歳の間でどのような違いが見られ、課題がありそうかを、子どもの具体的な姿を基に話し合う機会を設けてみてください。

新規採用の保育者がいることもあり、１学期の振り返りを園内研修としていましたが、こうした園内研修の柔軟な運営も各園で工夫できそうです。研修時間を捻出することは難しいものです。それでも、今回の改訂・改定で園長先生が考えたこと、理念やビジョンについて再検討したことを、いま一度保育者に説明する時間をつくってください。保育者が同じ方向を向き、日々の保育の道筋をつけることは園長先生の役割です。短い時間の積み重ねでもよいので、保育者がとまどうことなく次年度の指導に向かえる環境を整えるよう、注力していただきたいと思います。

御殿山すこやか園

◎2015年、御殿山幼稚園と五反田第二保育園が一体となって開園した、年齢区分型の幼保一体施設。幼保連携を図り、０～５歳児の一貫した育ちを支える保育を実践。保護者の就労状況に応じて長時間保育の受け入れ体制を充実させ、ビル内の限られた敷地を有効活用した温かく安心できる環境づくりに工夫を凝らす。

施設長　大澤洋美先生
五反田第二保育園長　大川美和子先生
御殿山幼稚園長　大澤洋美先生
所在地　東京都品川区北品川5-3-1
園児数　120人（０～５歳）

事例2

園の理念にこだわりながら 研修や月案に「10の姿」の視点を反映 子どもの育ちを語り合う

若竹保育園（千葉県千葉市・私立）

若竹保育園は、千葉市が進めている幼保小接続事業への協力を契機として、新しい保育指針の観点を取り入れた保育の振り返りに取り組んでいます。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下「10の姿」）の視点で研修や月案を振り返る際も、園の理念である「子ども一人・一人を基盤」に置いた見取りを重視しながら進め、園全体の取り組みとして定着しつつあります。

新指針の観点から小学校との接続を検討

モデル事業として幼保小接続を推進

千葉市では、文部科学省から委託された「幼児教育の推進体制構築事業」のモデル自治体として、2016年度より幼保小接続に取り組んでいます。若竹保育園は3園あるモデル園の1つに指定されました。千葉市こども未来局の鈴木規宏課長は、事業のねらいを次のように説明します。

「子ども・子育て支援新制度の下、国を挙げて幼児教育の質の向上に取り組んでいます。本市としても、各園共通の課題である『幼保小連携・接続』を起点とした幼児教育の充実に取り組むこととし、園や小学校にアンケート調査を実施しました。その結果、教職員同士が学び合いの場を充実させるとともに、卒園時点の幼児の姿について、課題認識を共有する必要性が明らかになりました。この事業では、5歳児後半を中心に実態に即したアプローチカリキュラムを作成し、スムーズな接続の実現を目指します」

各モデル園は、自園の課題や実態に即して小学校との接続のあり方を模索しています。千葉市こども未来局の宇野貴博主査はこう話します。

「3園には、各園の理念や方針、目の前の子どもの姿などに応じて柔軟に検討し、独自のフォーマット、方法でアプローチのしかたを提示してもらう考えです」

モデル園の1つである若竹保育園では、「遊び込むこと、良さを伸ばすことを通して自尊感情を高め、『自分も人も大切にできる子ども』に育てる」というこれまでの保育を大切にしながら、新指針の観点を取り入れた接続のあり方を検討しています（図1）。初めに、地域の小学校の校長先生と目線合わせを目的とした意見交換を行ったところ、双方の考えにズレがあることが分かりました。

若竹保育園
園長
山﨑淳一先生

若竹保育園
副園長
山﨑竜二先生

若竹保育園
主任
飯塚文子先生

千葉市こども未来局
こども未来部
幼保支援課
幼児教育・
保育政策担当
鈴木規宏課長

千葉市こども未来局
こども未来部
幼保支援課
幼児教育振興班
宇野貴博主査

園長の山﨑淳一先生はこう説明します。

「生活習慣の確立や読み書き・計算などは入学後に十分に指導できる。むしろ、何か困ったときに誰かに相談したり、人間関係を構築できる力をしっかりと育ててほしいといった要望を、小学校側から受けました」

一方、園側の要望として、一人ひとりの個性を大切にして子どもを育てる方針を小学校の指導にも生かしてほしいことを伝えました。

意見交換を通して、園での子どもの姿を見てもらう重要性を感じるとともに、今後、小学校の生活科の授業に５歳児が参加し、雰囲気に慣れてもらうことも決まりました。

「10の姿」を軸に園内で保育について語り合う

全員参加の園内研修で指針改定の要点を共有

アプローチカリキュラムの検討では、園として育てたい力がバランスよく育っているかを、新指針の観点から改めて見つめ直しています。まず、園内で新指針の共通理解を図るため、全職員が参加する職員会議で、副園長の山﨑竜二先生が改定の要点を解説する研修を行いました。

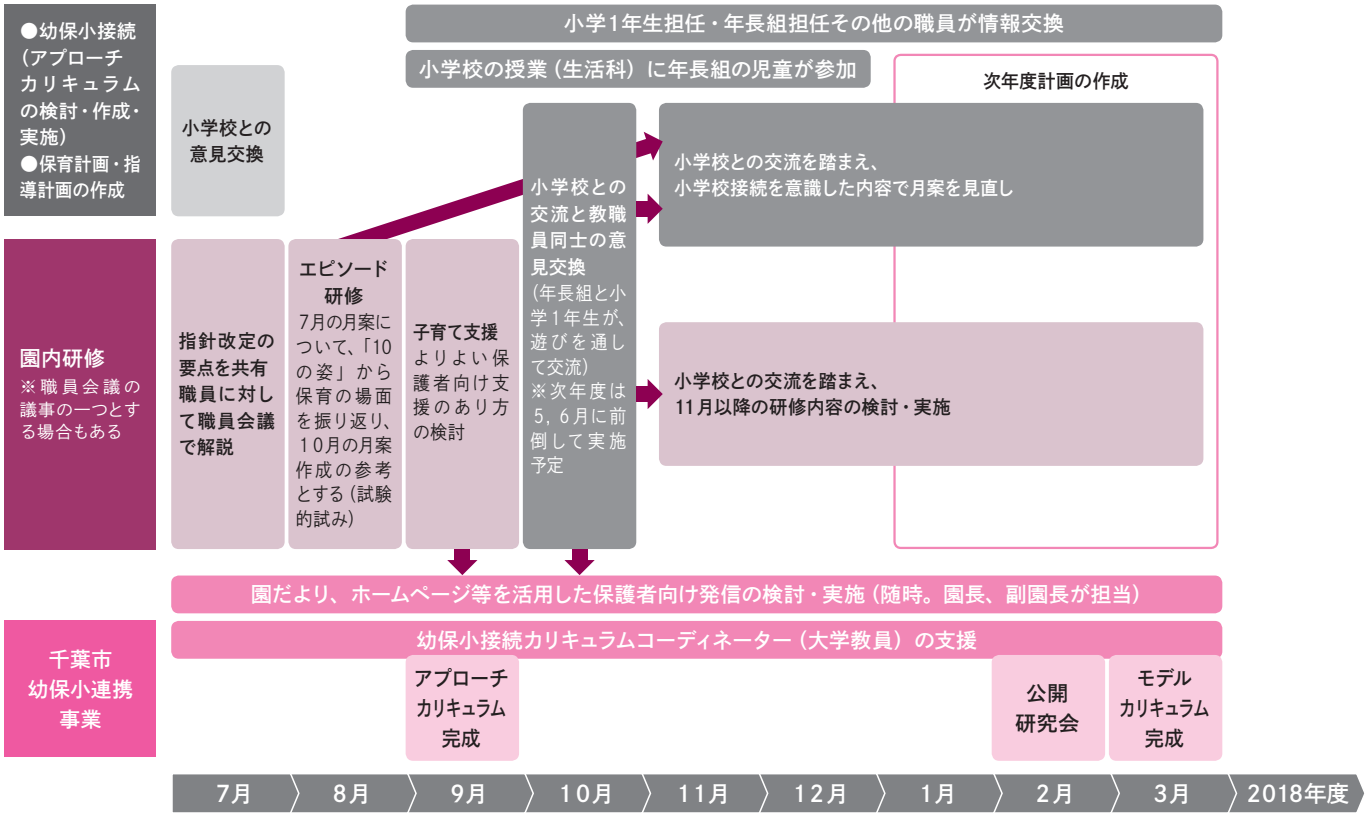
「単に改定内容を説明するのではなく、背景にある社会の変化を理解してもらい、保育者の自覚を促しました。例えば、今、幼児教育の重要性が注目されていることを説明し、『私たちは重要な役割を果たしている、もっと自信を持ってほしい』と伝えました。さらに『10の姿』の根底にある非認知能力を育てることの大切さもかみ砕いて伝えました」

日常の保育の場面を「10の姿」から見直す

これまで園では、保育の場面を撮影した映像からエピソードを記述し、それを基に子どもの育ちを語り合い、よりよい援助のあり方を検討する研修を続けてきました。

「日々の保育で出合う感動や面白さに着目する研修です。『この子は今こんなことに感動している』『あ

図1 若竹保育園の次年度に向けたスケジュール



※千葉市・若竹保育園提供資料を基に編集部で作成。

の子は友だちとの関係で落ち込んでいるがどう援助するか』といった視点で語り合います」（山﨑竜二先生）

指針改定を受け、このエピソード研修に「10の姿」の視点を取り入れるようにしました。前回は、園で飼育していたニワトリが死んでしまったときに子どもたちの発案で行ったお葬式の場面と、木登りの順番を替わってほしいのに最初に登った1人が下りるのを嫌がって言い争いになっている場面を、それぞれ10分ほどの映像に編集。保育者は映像を見て、「10の姿」のうち、どの姿が育っているかをワークシートに書き出しました（**写真**）。主任の飯塚文子先生は、次のように説明します。

「自分たちが保育の中で大切にしていることが、『10の姿』にどうつながっているかを確認し合いました。『10の姿』の捉え方に迷う保育者もいましたが、これまでの保育の延長上にあると実感できる機会にもなったと思います」

保育者からは次のような感想が聞かれ、研修を通して多くの気づきがあったことがうかがえます。

◎どう育ってほしいかを考えて保育をするかで、エピソードの捉え方は変わると感じた。普段から意識すれば、子どもへの接し方が変わり、よりよいアプローチができると思う。

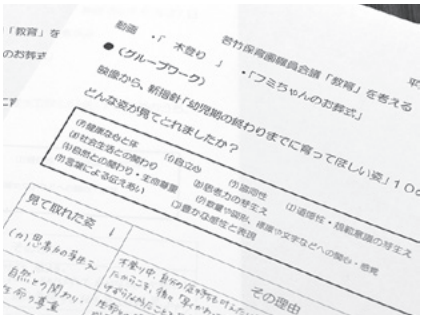
◎1つのエピソードでも様々な子どもの姿があると改めて感じた。日々の保育の中で、できるだけ見逃さないようにしたい。

「10の姿」にとらわれ過ぎず子どもの姿を出発点に

研修を重ねる中で、「10の姿」を通して子どもを見取る難しさや注意点を意識するようになりました。保育者からは、「私たちが育っていると感じることと、小学校の先生の考えの違いから、子どもがつらい思いをしないようにしたい」との声が上がりました。

「ある卒園児が、田んぼに咲いた花に見とれて小学校に遅刻したそうです。その子の感性の豊かさは間違いなく長所ですが、『10の姿』の規範意識という観点だけで判断するとよくない面と捉えられるかもしれません。あくまでも一人ひとりの姿を出発点として、『10の姿』を捉える必要性を感じます」（山﨑淳一先生）

そのためにも、今後、小学校の先生と「10の姿」を通して子どもの育ちを語り合うなど、成長の観点を共有する必要性を感じています。

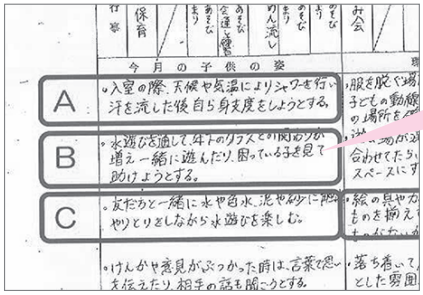


写真● 保育者は映像を見て、子どもの姿から見取れた「10の姿」の項目と、その理由を書きました。同じ映像を見ても、保育者により読み取れる姿は異なるため、それぞれの視点を共有することで子どもの見方を広げることができます。

「保育要録の工夫も今後の課題です。子どもへの配慮とともに、成長の感動を伝えられる保育要録を作成したいですね」（山﨑竜二先生）

「10の姿」はすべての保育者に浸透していないため、年間指導計画を急に変えることはせず、まず5歳児の月案を振り返る際に「10の姿」の視点を取り入れ、その内容を後の月案作成に生かすことから始めました。園長、副園長、主任、5歳児担任の保育者が集まり、月案に書かれている「今月の子どもの姿」について、「10の姿」のうちどの姿が読み取れるかを話し合いました（**図2**）。例えば、「水遊び」については「協

図2 月案を「10の姿」で振り返る



●研修で読み取った「10の姿」
B（水遊び）の例
（ウ）協同性
（エ）道徳性・規範意識の芽生え（「相手の立場に立って行動する…」というところから見られるのではないか）
（オ）社会生活との関わり（「相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ…」という部分が重なる）

●そのほかの保育者からの意見
・「水遊びを通して…困っている子を見て助けようとする」とあるが、目的が「困っている子を助けようとする」になっており、「水遊び」がその手段となっている。水遊びも目的だと思うので、分けて書いてはどうか。
・「遊び」はそれ自体が目的であり、何かのためのものではない方がよいのではないか。例えば、本を読むとして、その本自体が面白いから読むのか、何かほかの目的の参考にするために読むのかで、意味が違ってくる。

7月の保育計画を基にした振り返りでは、5歳児の姿からどのような育ちが見て取れたか、「今月の子どもの姿」（太枠内）を基に話し合われました。話し合いの結果は幼保小接続カリキュラムコーディネーターを務める千葉大学の砂上史子先生にも共有され、砂上先生からは「『今月の子どもの姿』欄の記載のしかたによって（例えば、BとCの記載順を入れ替える）、子どもが遊びを楽しむことを第一にしていることが保育者同士で共有しやすくなる」といったアドバイスが行われました。

同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」が読み取れたことを確認。続いて、「水遊びを楽しむこと自体が大切な目的なので、水遊びという手段を通して見られた子どもの育ちとどのように分けて考え、月案に落とし込めばよいだろうか」など、活動の目的や月案の書き方にも話が及びました。並行して園内研修などを通して、全ての保育者の間で「10の姿」の共通理解を深め、４歳児までの保育もさらに充実させていく方針です。

指針改定を機に、保護者向けの情報発信をいっそう強めていくことも考えています。

「情報発信は園の大切な役割です。新指針の内容も保護者に分かりやすく説明することで協力を得やすくなり、園が目指す保育に近づきやすくなるはずです」（山﨑竜二先生）

改定はチャンス 保育の質をさらに向上させたい

指針改定を踏まえて保育を見直す試行錯誤を続ける中で、これまでの実践を振り返り、自園の保育で充実していた点や足りなかった点が見えてきたといいます。

「言葉による伝え合いや思考力を伸ばす支援は比較的充実している一方、数量や図形などへの関心・感覚はやや弱かったと感じました。どんぐり遊びの中で数を意識したり、散歩の途中で道路標識に気づいたりというように、遊びや活動の中で促す必要性を感じました」（飯塚先生）

園全体で取り組む中で、保育者の意識も高まりつつあります。

「幼児教育の意義が社会的に認められたことは、自信や誇りを持つきっかけとなり、日々の保育の励みになっています」（山﨑竜二先生）

そうした意識の高まりを支えとして、保育の質をいっそう高めていくことを目指しています。

「『10の姿』から保育を見直す作業など、仕事が増える側面もあることは否めません。しかし、その努力が保育の質の向上につながり、ひいては子どもに還元されると考えると、今回の改定は大きなチャンスになると捉えています」（飯塚先生）

今後、園では、小学校との交流など、接続をより意識した指導計画を作成し、５歳児後半の具体的なアプローチカリキュラムを作成していきます。その後、モデル園３園の取り組み成果を踏まえてモデルカリキュラムが作成・周知され、市全体の幼保小のスムーズな接続に生かされていく見通しです（P.11 図１）。

幼保小接続カリキュラムコーディネーターが語る 若竹保育園の実践

園の理念を明確に持っているからこそ 保育の質の向上につながっている

千葉大学教育学部准教授 砂上史子（すながみふみこ）

◎博士(子ども学)。臨床心理士。専門は保育学。文部科学省、厚生労働省、内閣府それぞれの部会等において委員を務め、平成29年3月告示の「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の改訂(定)作業に携わる。主な共著書に『ここがポイント！ 3法令ガイドブック』（フレーベル館）、『保育学講座③ 保育のいとなみ』（東京大学出版会）。

私は現在、千葉市の幼保小接続カリキュラムコーディネーターとして若竹保育園の取り組みをお手伝いしています。若竹保育園は、自園の保育が目指すこと、大切にすることを明確に意識した上で、新指針の観点を取り入れようとしているため、保育の質の向上につながりやすくなっています。小学校教員や保護者との連携を意識している点も重要だと思います。保育者ならではの感覚は、保護者にはすぐには分かってもらえないこともあるかもしれません。どちらか一方を正しいとするのではなく、互いの視点をきちんと伝えた上で、「違い」も含めて分かり合い、幼保小接続のため協働する努力も大切でしょう。園では「10の姿」を観点として取り入れながら保育の見直しを進めています。活動によっては項目ごとに濃淡があることを意識することも大切です。

今後は、よりいっそうの保育の言語化にも取り組んでいただきたいですね。言語化することで保育者の間で共有しやすくなります。言語化は、自身の保育の改善や新しいカリキュラムの作成においても不可欠な作業です。研修におけるディスカッションなど口頭でやり取りすること自体が言語化の１方法ですが、「10の姿」などで振り返った結果、どのような共通理解があり、次の指導計画に何を追加するか、といった記録を残すことで、いっそう実効性を伴う形での保育の質の向上に生かしやすくなるでしょう。

若竹保育園

◎保育目標に「自分も人も大切にできる子どもに」を掲げ、子どもと職員と保護者が集団生活の楽しさを求め、協力し合う園を目指す。自然を生かした６つの園庭では存分に遊び回る子どもの姿が見られ、地域とのかかわりも充実している。

園長　山﨑淳一先生
所在地　千葉県千葉市若葉区若松町 336
園児数　180人（0～5歳）

参考資料

「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」改訂・改定のポイント

平成30年度施行の新しい「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」のポイントをまとめました。園内研修等でご活用ください。

※2017年春号の特集で詳細をご紹介しています。併せてご覧ください。（「ベネッセ　これからの幼児教育」で検索）

POINT 1 ここが変わる！幼稚園教育要領

幼児教育で育みたい資質・能力として「10の姿」が明記される

小学校以降とのつながりを踏まえて示される「3つの柱」を土台に、5歳児修了時までに育ってほしい資質・能力が「10の姿」として具体的に示されます。

「カリキュラム・マネジメント」の確立が求められる

幼児教育において育みたい資質・能力の実現に向けて、園全体で「カリキュラム・マネジメント」を確立することが求められます。

「主体的・対話的で深い学び」の充実が求められる

小学校以降のアクティブ・ラーニングの土台を形成する学びとして、「主体的・対話的で深い学び」の充実が求められます。

預かり保育と子育て支援のかかわりが求められる

地域や家庭の実情に合わせて、これまで以上に子育て支援にかかわることが求められます。

POINT 2 ここが変わる！保育所保育指針

0～2歳児の保育に関する記載が充実する

0～2歳児保育の重要性がますます明らかになる状況などを受け、3歳児以上とは別に項目を設けるなどして記載内容が充実します。

保育所が幼児教育の場として積極的に位置づけられる

保育所が幼児教育の重要な一翼を担っていることを踏まえ、保育内容や保育の計画・評価のあり方などに関する記載が充実します。

環境の変化を踏まえた健康・安全の記載が見直される

災害への対応、食育の推進などの観点から、安全な保育環境の確保に関して記載が見直されます。

家庭や地域と連携した子育て支援の必要性が強調される

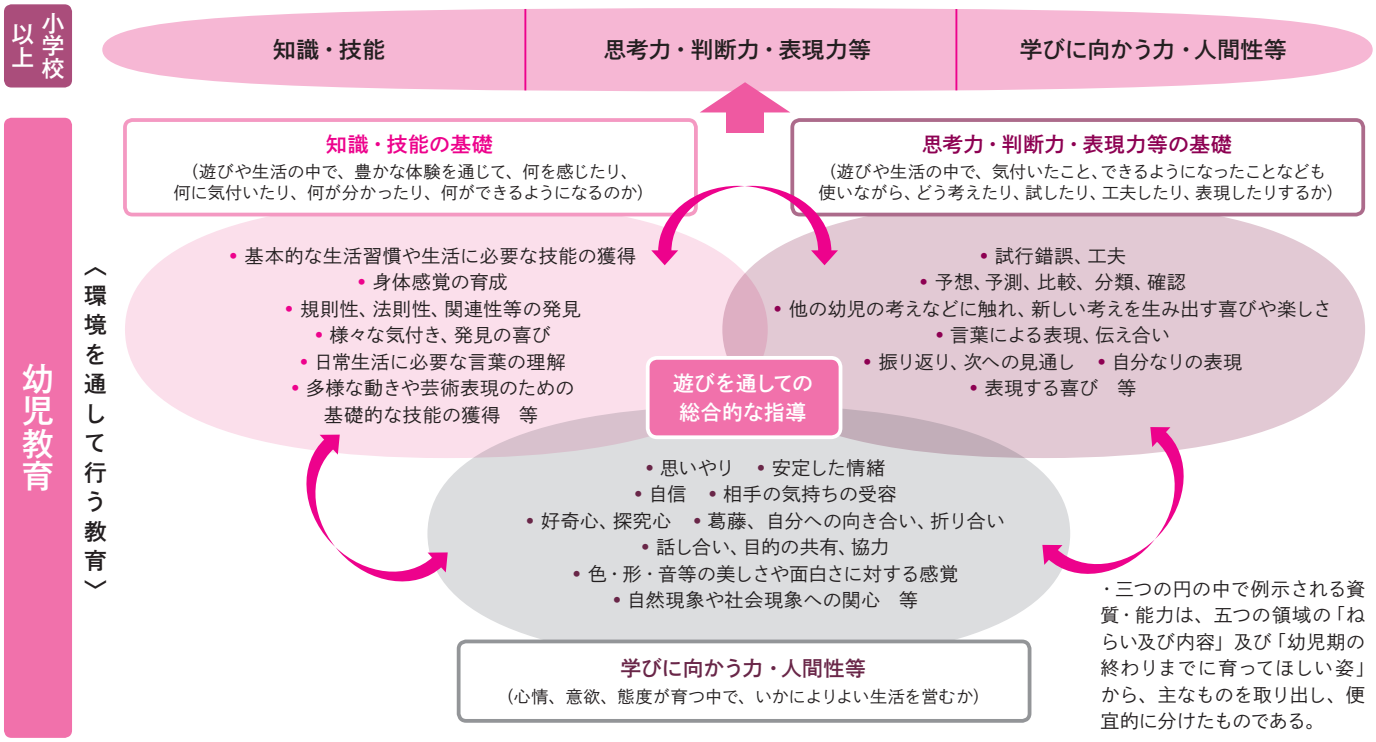
子どもの育ちを保護者と共有すること、また地域における子育て支援をいっそう重視することが求められます。

職員の資質・専門性の向上が求められる

研修を充実させたり、園内に保育者が専門性を高め合う環境をつくったりすることが求められます。

POINT 3 幼児教育において育みたい資質・能力（「3つの柱」）

幼児教育において育みたい資質・能力は、個別に取り出して身につけさせるものではなく、遊びを通しての総合的な指導を行う中で一体的に育んでいくことが重要。



・三つの円の中で例示される資質・能力は、五つの領域の「ねらい及び内容」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から、主なものを取り出し、便宜的に分けたものである。

※文部科学省　「幼児教育部会における審議の取りまとめ」（平成28年8月26日）より。

POINT 4 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（「10の姿」）

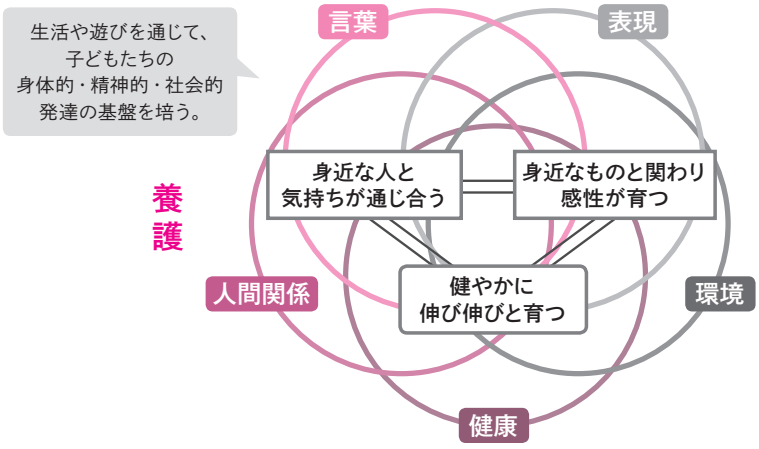
従来の5領域を具体的な姿として表したもので、新要領・指針に共通して記載される。

❶健康な心と体	幼稚園生活（保育所の生活／幼保連携型認定こども園における生活）の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
❷自立心	身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。
❸協同性	友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。
❹道徳性・規範意識の芽生え	友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。
❺社会生活との関わり	家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園（保育所／幼保連携型認定こども園）内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。
❻思考力の芽生え	身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
❼自然との関わり・生命尊重	自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にする気持ちをもって関わるようになる。
❽数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。
❾言葉による伝え合い	先生（保育士等／保育教諭等）や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
❿豊かな感性と表現	心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

※平成29年告示「幼稚園教育要領」（＊1）「保育所保育指針」（＊2）「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」（＊2）を基に作成。①～⑩の表記は、＊1は(1)～(10)、＊2はア～コとなる。

POINT 5 5領域（1歳児～）と3つの視点（0歳児）との関係

新しい保育所保育指針では、乳幼児保育の「ねらい」及び「内容」について3つの視点としてまとめている。



※厚生労働省「保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめ」（平成28年12月21日）より。

第2回
乳幼児の親子のメディア活用調査

近年、スマートフォンやタブレット端末を始めとするメディアの発達は急速に進み、乳幼児がいる家庭の日常生活においても、そうしたメディアが身近な存在になりつつあります。長時間使用による依存などを心配する声も聞かれる中、乳幼児とその保護者はどのようにメディアとかかわっていくとよいか、ベネッセ教育総合研究所が行った最新の調査結果を基に考えていきます。

引用・転載時のお願い 本調査の結果を引用・転載される際には、調査名称を記載してください〈例：ベネッセ教育総合研究所「第2回 乳幼児の親子のメディア活用調査」(2017)〉。

インタビュー

メディアから得る情報が豊かになるほど実体験を増やす保育の工夫を

今回の調査では、スマートフォンが家庭に広く普及し、子育ての場面でも広く利用されていることが分かりました。乳幼児のいる家庭ではどのようにメディアを活用したらよいのでしょうか、そして園ではどのような子育て支援ができるのでしょうか。白梅学園大学学長の汐見稔幸先生にうかがいました。

バランスよくメディアを利用 過度な心配は必要ない

私たち人類は、自分たちの足跡を残すため、また周囲の世界について知るために、文字、印刷技術、情報技術などを開発してきました。そして現在、インターネットが開発され、スマートフォンなどの新しいメディアが登場したことで、世界中の情報が、わずかな時間でどこにいても入手できる時代を迎えました。

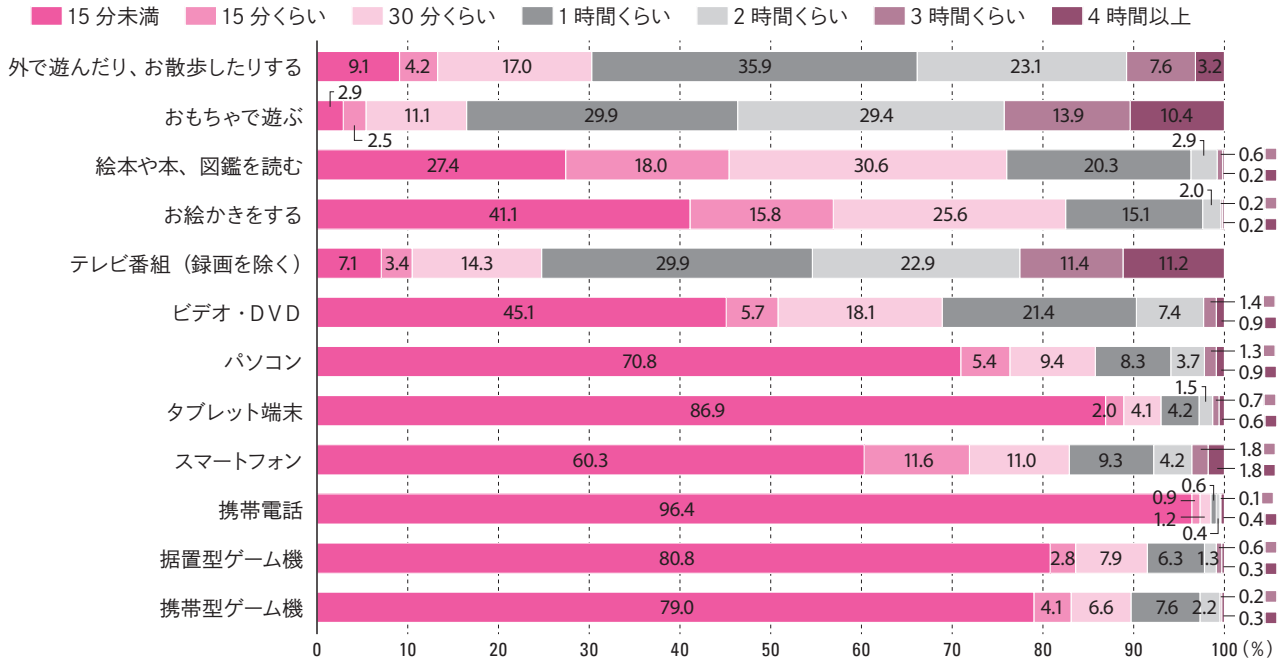
調べたいことがすぐに調べられ、ゲームや音楽も楽しめる身近なメディアに、子どもが興味を持つのは、ごく自然のことです。自分の周囲の世界を知りたいというのは、人間の本能です。メディア利用にはネガティブな側面もありますが、小さいうちからメディアを活用し、可能性を広げる子どもがたくさんいるのも事実です。例えば、小学生でも自分の興味のある勉強をどんどん進め、大学生並みの知識を得ることができたり、海外の先生にインターネットを通じて英会話のレッスンをしてもらったりすることも可能です。子どもたちが学校段階や学年に応じて一斉に、一から順に知識を身につけていた時代から、大きく変わりつつあります。

今回の調査では、乳幼児のいる

白梅学園大学学長
汐見稔幸 しおみ・としゆき

白梅学園大学学長・東京大学名誉教授。BPO（放送倫理・番組向上機構）青少年委員会委員長、社会保障審議会児童部会保育専門委員会委員長を務める。専門は教育学、教育人間学、育児学。著書に『0～3歳 能力を育てる 好奇心を引き出す』（主婦の友社）、『この「言葉がけ」が子どもを伸ばす！』（PHP研究所）など。「乳幼児の親子のメディア活用調査」では第1回から研究アドバイザーを務める。

■メディアを利用する時間と実体験・活動を行う時間（平日1日あたり）



実体験・活動の時間は、メディアを利用する時間よりも大幅に長く、1日の生活時間の中でバランスがとれている。

※メディア以外に関する項目は、幼稚園や保育園等の園や施設での活動時間を含む。「15 分未満」には、家庭にそのメディアがない場合を含む。

家庭のスマートフォンの所有率が92.4%に上ることが分かりました。4年前の同調査から30ポイント以上も増加し、予想以上に短期間でスマートフォンが幅広い世代に普及したという印象です。ただ、乳幼児が長時間利用している家庭はごくわずかでした。外遊びや絵本を読むなどの時間が減少しているわけではなく、1日の生活の中にバランスよくメディアを取り入れようと保護者が配慮している様子がうかがえます。

視聴する内容やルールについても気にかけており、乳幼児のメディア利用に対して過度な心配をする必要はないと言えます。

間接情報と実体験がつながり、真の知性をつくり上げる

メディアがより身近なものになっているからこそ、大切にしてほしいことが2つあります。1つは、親子のコミュニケーションのツールとして活用してほしいということです。子どもがスマートフォンで料理の動画を見ているときに、「今度、家でも作ってみようか」と言うだけでも構いません。メディアからの情報を親子で共有することで、コミュニケーションのきっかけになり、親が語りかけることで内容に対する子どもの理解も進みます。今後、電子絵本などが普及し、3D映画のように立体的な映像を手軽に楽しめるようなツールが出てくることも予想されます。上手にメディアを活用し、豊かな親子の会話を楽しんでいただきたいと思います。

もう1つは、メディアから間接情報を得るだけでなく、実体験も大切にしてほしいということです。メディアで得た知識を真の理解へと深めるには、外に出て五感を使って感じることが非常に大切です。例えば、きのこの名前を知っているだけでなく、においや触ったときのしっとりした感触を実際に体験することで、間接情報と実体験がつながり、知識が腑に落ち、真の知性が身につくのです。

園の先生方にお願いしたいのは、自然の中で五感を使った実体験の面白さを子どもたちに伝えてほしいということです。私がお勧めしたいのが、「7つの曜日の体験」です。

【月】星や月を見る。
【火】たき火をする。
【水】水遊びや川遊びをする。
【木】森の中で遊ぶ。
【金】金属に触れる。
【土】土遊びをする。
【日】太陽の出ているときに外遊びをする。

都市部を中心に実践が難しい場合もありますが、可能な範囲でこうした自然体験をたくさんさせてください。園で自然と遊ぶ技を身につけ、その楽しさを実感できるような保育をぜひ工夫していただきたいと思います。

調査データ

乳幼児のメディア利用の実態と母親の意識・かかわり方

ここからは「第2回 乳幼児の親子のメディア活用調査」の中から特に園での研修や保護者向け資料として活用できるデータをピックアップしてご紹介します。

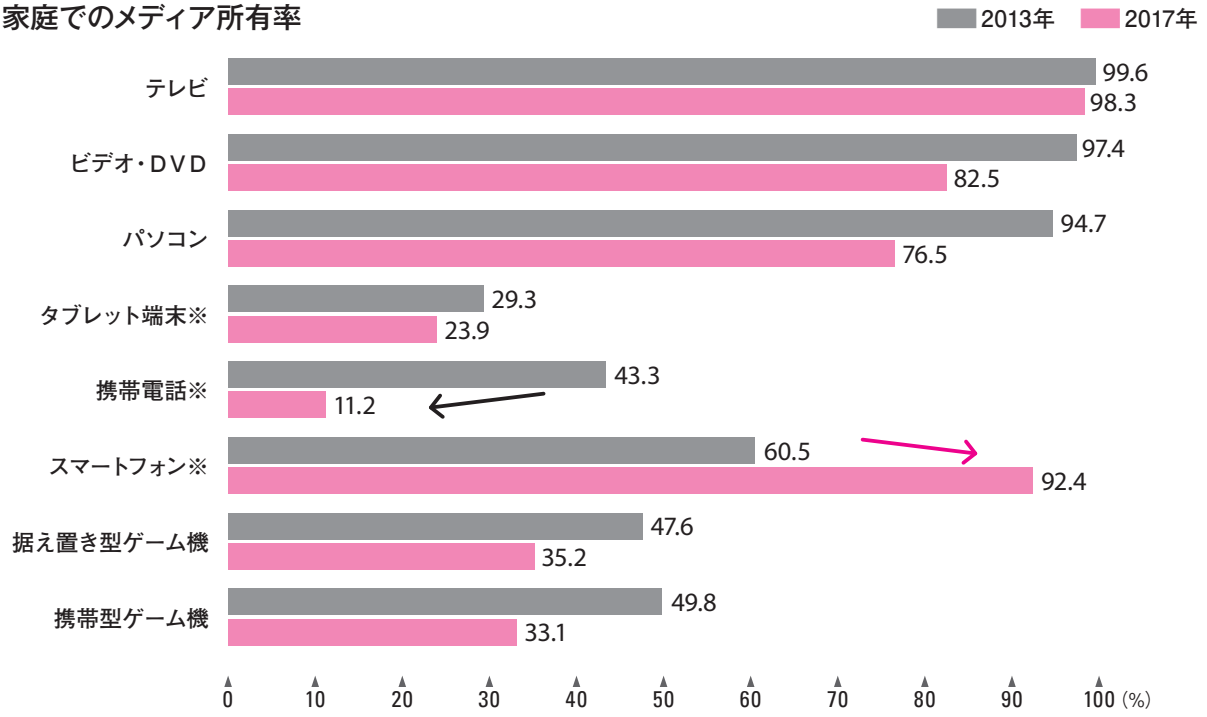
■調査概要
出典：第２回 乳幼児の親子のメディア活用調査
調査対象：第１子が0歳6か月～6歳までの就学前の乳幼児を持つ母親
調査時期：2017年3月
調査地域：東京・神奈川・千葉・埼玉
調査方法：インターネット調査
回収サンプル数：3,400名（内訳：0歳後半／388名、1～5歳の各年齢／515名、6歳／437名）
調査項目：子どもの年齢ごとのメディア活用実態（1週間あたり、1日あたり、メディアの種類、内容、目的）／子どもの生活時間におけるメディア活用のバランス／保護者自身のメディアの活用状況／子どもがメディアに接する際のかかわり、悩みや気がかり

詳しい調査結果はこちらからご覧になれます。ぜひご活用ください。▶ http://berd.benesse.jp/

0～6歳児のいる家庭のスマートフォン所有率は4年間で大きく増加

Q ご家庭で、次のものをお持ちですか。（複数回答）

図1 家庭でのメディア所有率



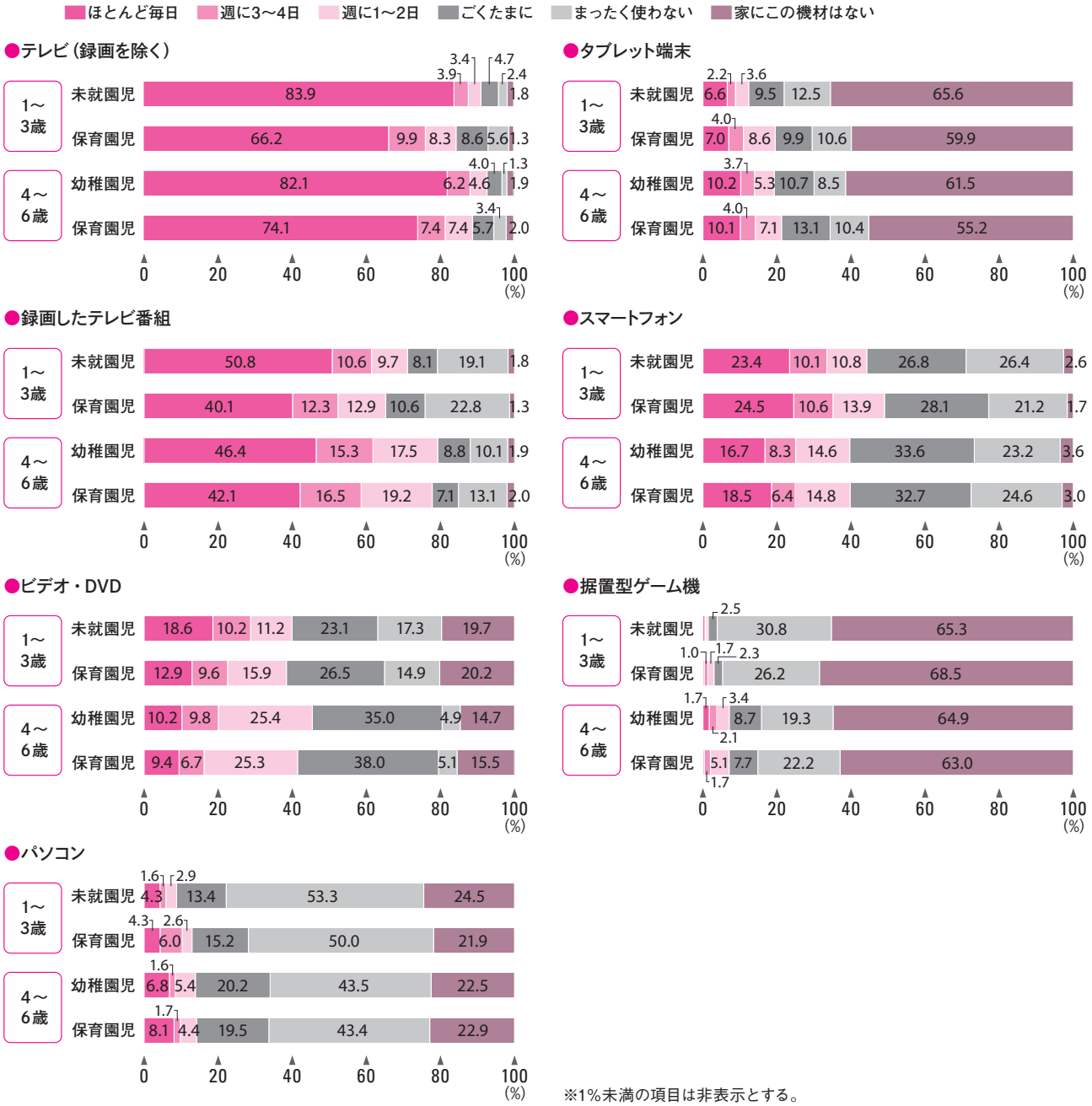
※携帯電話、スマートフォンは母親自身の使用の有無、タブレット端末は2017年のみ母親自身の使用の有無を聞いている。

◎家庭でのスマートフォン所有率は、2013年は60.5％でしたが、2017年は92.4％に増加しました。他のメディアは所有率が低下しました。特に携帯電話の減少幅が大きく、2013年の43.3％から2017年は11.2％に減少しました。グラフではご紹介していませんが、年代別に見ると、母親の年代が若いほど、スマートフォン以外のメディアの所有率が大きく減少しています。

約２割の子どもが「ほとんど毎日」スマートフォンに接している

Q お子さまは、次のものを、ご家庭で1週間あたりどれくらい見たり使ったりしていますか。

図2 子どもの1週間あたりのメディア使用頻度



※1%未満の項目は非表示とする。

◎1週間のうち、使用（視聴）する頻度が最も高いのはテレビ（録画を除く）で、約6〜8割（0〜6歳全体では78.7%）の子どもが「ほとんど毎日」見ており、さらに、録画したテレビ番組も約4〜5割（0〜6歳全体では44.0%）が「ほとんど毎日」見ています。保育園児に比べて未就園児や幼稚園児の方が、テレビの視聴頻度が高い傾向が見られます。また、子どもがテレビを見ている頻度は、録画かどうかを問わず、他のメディアと比較して非常に高いことも分かります。スマートフォンは2割前後（0〜6歳全体では20.6%）が「ほとんど毎日」接しており、特に1〜3歳児の頻度が高めです。グラフではご紹介していませんが、前回（2013年）調査と比べて使用頻度が最も増えたメディアがスマートフォンです。とはいえ、そのスマートフォンも「まったく使わない」と「ごくたまに」使用する割合の合計は5〜6割となっています。

外出先や家事の最中など多くの場面で子どもがスマートフォンに接する割合が増加

Q お子さまは、次のような場面でデジタルメディアを使っていますか。（複数回答）

図3 子どもがメディアを使う場面

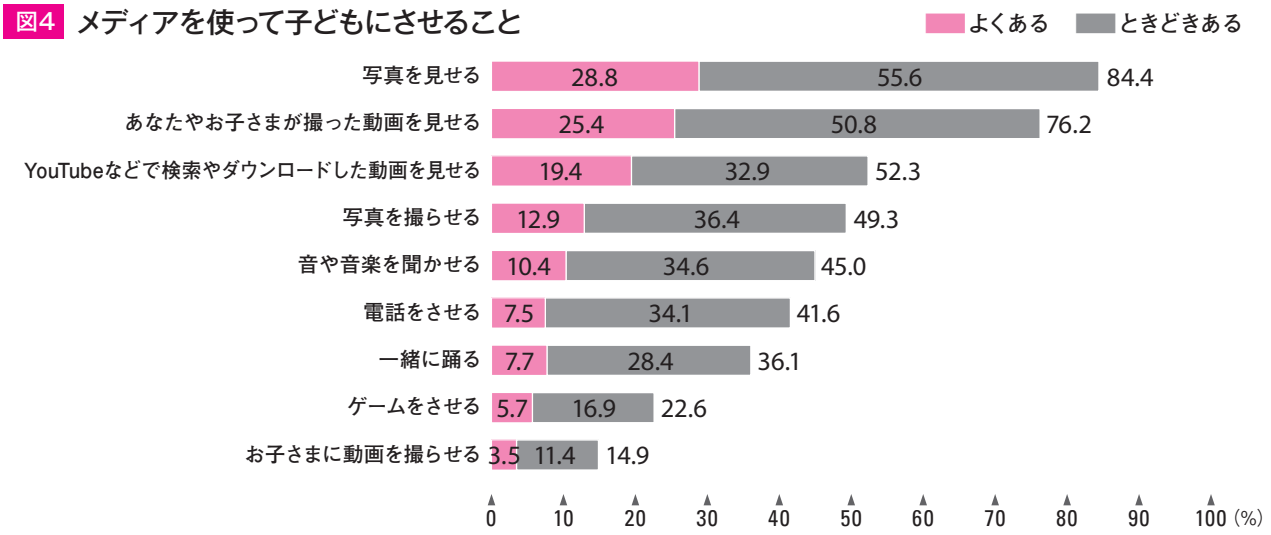
（%）

	テレビ番組（録画を含む）		ビデオ・DVD		タブレット端末		スマートフォン		携帯型ゲーム機	
	2013年	2017年	2013年	2017年	2013年	2017年	2013年	2017年	2013年	2017年
自動車、電車などで移動しているとき	7.3	5.4	16.9 ↘	11.1	3.3	3.8	16.2	20.9	3.2	1.3
外出先での待ち時間	1.0	0.9	1.8	0.9	4.0	3.8	23.6 ↗	32.7	4.5	1.7
家で食事をしている間	32.3	30.4	7.9	5.5	0.4	1.4	0.5	2.3	0.2	0.1
布団やベッドに入ってから寝るまでの間	3.6	5.1	2.0	1.6	1.1	2.8	3.8	8.0	0.6	0.5
親が家事などで手をはなせないとき	72.0 ↘	62.9	45.1 ↘	29.5	4.9	8.9	5.9 ↗	14.8	4.8	2.6
子どもがさわぐとき	26.9	27.0	21.4 ↘	14.4	4.5	6.3	13.0 ↗	22.9	1.8	1.7
子どもが使いたがるとき	32.2 ↘	25.7	30.2 ↘	16.1	8.5	10.6	21.8 ↗	28.9	8.2	3.6
子どもが約束を守ったとき（ごほうびとして）	—	12.5	—	8.6	—	5.2	—	12.0	—	2.4

※網かけ部分は、それぞれの場面で最も使われている割合が高いメディア。矢印部分は、2013年から ±5ポイント以上変化があった項目。
※それぞれのメディアが家庭にある場合のみ回答。「子どもが約束を守ったとき（ごほうびとして）」は 2017年のみの項目。

Q お子さまに、携帯電話・スマートフォン、タブレット端末、パソコンで、以下のことをさせることはありますか。

図4 メディアを使って子どもにさせること



※グラフの右側の値は「よくある」「ときどきある」の合計。※そのメディアが「家庭にない」「使わない」場合も回答。

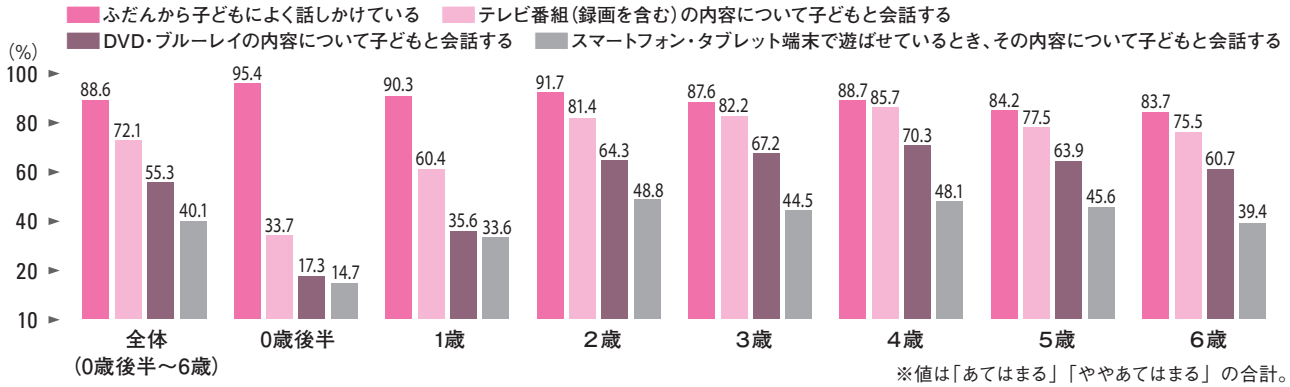
◎母親は様々な場面で子どもにメディアを使わせていますが、中でも「親が家事などで手をはなせないとき」にテレビを見せる母親の割合が高く、62.9％でした。また、多くの場面でテレビやビデオ・DVDが使われる割合が減少し、スマートフォンが使われる割合が増えている点も注目されます（図3）。スマートフォンやタブレット端末などを使って、子どもに最もよくさせることは「写真を見せる」（84.4％）でした（図4）。次いで「あなたやお子さまが撮った動画を見せる」（76.2％）が続きます。全体的に、画像や映像を見せる割合が高いことが分かります（図4参照）。

「お子さまに動画を撮らせる」「ゲームをさせる」割合は、全体では低いのですが、詳しく見ると年齢差が見られます。図では示していませんが、例えば「お子さまに動画を撮らせる」割合は1歳で5.4％ですが、5歳で20.6％、6歳では23.1％に増加します。「ゲームをさせる」も1歳では6.4％ですが、5歳になると38.3％、6歳では41.2％となっています。子どもの発達段階や興味・関心に応じて、保護者が使わせ方を変えている様子がうかがえます。

7割超の母親が
テレビの内容について子どもと会話

Q あなたはお子さまの子育てについて、どのように行動していますか。

図5 親子でのコミュニケーション（会話）

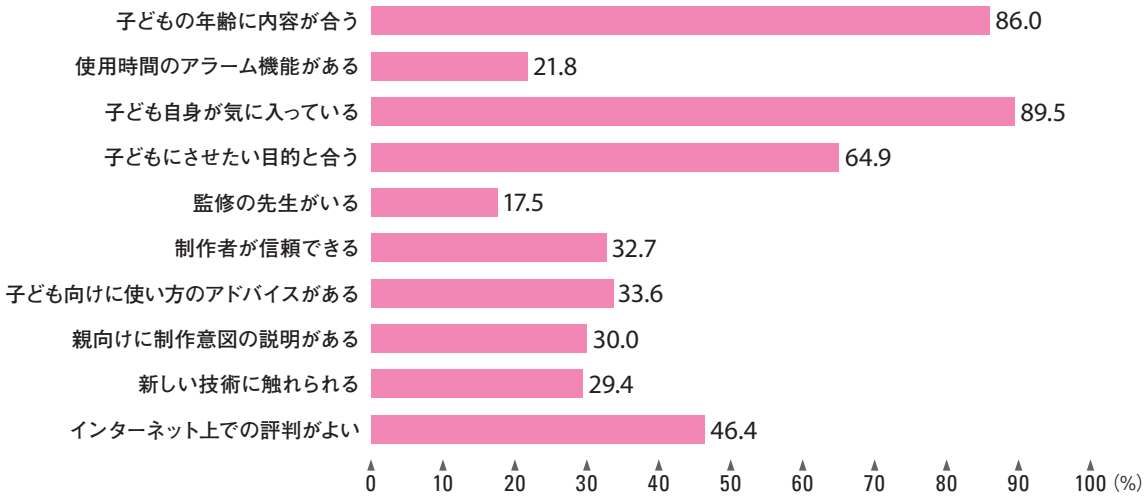


※値は「あてはまる」「ややあてはまる」の合計。

◎普段、メディアの内容について親子がどのくらい会話しているかを調べたのが上のグラフです。「ふだんから子どもによく話しかけている」と答えた母親の割合は約9割。特に子どもの年齢が低いほどよく話しかけているようです。テレビ番組、DVD・ブルーレイ、スマートフォン・タブレット端末の中では、テレビの内容について子どもと会話する割合が最も高いことが分かります。これはどの年齢でも同じ傾向です。また、0歳から3、4歳にかけて、メディアの内容について会話する割合が全体的に増加しています。これは子どもの言葉の発達とも関係していると思われます。

Q お子さまがよく見る（使う）動画（DVD、YouTubeなど）やアプリ・ソフトを選ぶとき、どんなことを基準に選んでいますか。

図6 動画やアプリ・ソフトの選択基準



※値は「あてはまる」「ややあてはまる」の合計。　※そのメディアが「家庭にない」「使わない」場合も子どもに使わせることを想定して回答。
※無答不明を除く。

◎子どもが見る（使う）動画やアプリ・ソフトを選ぶ基準の中で最も割合が高かったのは「子ども自身が気に入っている」ことと、「子どもの年齢に内容が合う」ことで、それぞれ回答者の89.5％、86.0％が「あてはまる」または「ややあてはまる」と答えました。割合の高い項目を見ると、子どもの実態に合っているかをより重視する傾向がうかがえます。一方、「監修の先生がいる」「制作者が信頼できる」「子ども向けに使い方のアドバイスがある」「親向けに制作意図の説明がある」などの割合は相対的に低めですが、2013年と比べると増加傾向にあります（図示は省略）。

Benesse

表紙／裏表紙
千葉県 ● 若竹保育園

『これからの幼児教育』刊行に寄せて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

これからの幼児教育 2017 秋
2017年10月1日発行 編集発行人 岡田晴奈 発行所 (株)ベネッセコーポレーション
©Benesse Corporation 2017

7PL056